

マスク着用行動に関連する要因の検討

—年代と性別の観点から—

小泉日向子, 笹川萌々子, 鈴木千鶴, 中山未悠

(学籍番号: 20PS1077, 20PS1130, 20PS1004, 20PS1110, 指導教員: 金城光教授)

問題

近年, 新型コロナウイルスの感染拡大を受け, 日常生活におけるマスクの着用が一般化すると共にマスク着用動機も多様化している。様々な種類のマスクの感染阻止能力を評価した Ueki et al.(2020)の研究では, 綿マスク, サージカルマスク, N95 マスクにおいて有意な阻止効果があることを報告している。他方, Nakayachi et al.(2020)は, 他者への同調とマスクの着用との関連を示した。吉澤・吉澤(2022)は, 上記の要因以外に「顔を隠す安心感」を新たなマスク着用動機として指摘した。2022年10月時点で「屋外でのマスク着用が原則不要」という厚生労働省の方針に従っている人が少ない状況下で, 必ずしも全員が屋内屋外問わずマスク着用の推奨が取り消されることを望んでいるとは限らないと考えられる。しかし, マスクの着用動機における年代間や性別間の差について未だ明らかになっていない。

本研究では着用頻度と実際の着用に至るまでの着用動機を総称して着用行動と定義し, 年代間や性別間のマスク着用行動の差について検討する。また, 今後マスク着用の推奨が取り消される場合に望ましいと感じるかについて調査を行う。

目的

本研究では, 新型コロナウイルス蔓延後のマスク着用行動について着用動機と頻度の観点から調査し, 着用行動と年代や性別との関連を検討することを目的とした。先行研究より, 本研究で検討する仮説は, 以下の通りである。

仮説1: マスク着用行動および推奨解除の望ましさについて, 年代や性別によって違いがある。

仮説1-A: 中高年よりも若者が, 「顔を隠す安心感」を動機としてマスクを着用している。

仮説1-B: 男性に比べて女性が, 「顔を隠す安心感」を動機としてマスクを着用している。

仮説2: 「同調」を動機としてマスクを着用している人はマスク着用の推奨が取り消されるのを望んでいる, 「顔を隠す安心感」を動機としてマ

スクを着用している人はマスク着用の推奨が取り消されるのを望んでいない可能性がある。

方法

2022年10月26日から2022年11月11日に行われた調査への回答者334名のうち, 有効な回答は18歳~30歳84名, 31歳~64歳199名の計283名(男性128名, 女性155名: 平均年齢37.5歳, $SD = 12.40$)であった。調査はQualtricsを用いて行われ, 31歳~64歳についてはクラウドソーシングを用いて募集し, 謝礼を150円とした。質問項目は, 基本属性のほか, 「着用頻度」「着用動機」「推奨解除の望ましさ」について尋ねた。マスク着用動機に関しては, 「感染予防」「同調」「顔を隠す安心感」の他, 予備調査で明らかになった「身だしなみ」「喉の保湿」「着脱の面倒さ」を加えた。

結果

性別および年代とマスク着用行動および推奨解除の望ましさとの関係

独立変数を性別(男性・女性)と年代(20代以下・30代・40代・50代以上), 従属変数をマスク着用動機(感染予防・同調・顔を隠す安心感・身だしなみ・喉の保湿・着脱の面倒さ)とする 2×4 の2要因参加者間の分散分析を行った(Table 1)。その結果, 身だしなみと喉の保湿の2項目において, 有意差が認められたが, 顔を隠す安心感では性別, 年代ともに有意な差は認められなかった($F(1, 275) = 3.54, p = .061$; 偏 $\eta^2 = .01, F(3, 275) = 2.45, p = .064$, 偏 $\eta^2 = .03$)。身だしなみの項目は, 性別, 年代ともに主効果に有意差が認められた($F(1, 275) = 9.84, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .04, F(3, 275) = 3.22, p < .05$, 偏 $\eta^2 = .03$)。性差について, 女性が男性よりも身だしなみの得点が高い傾向にあった。年代においては, 30代の得点が20代の得点より有意に高い傾向にあった($p < .05$)。喉の保湿の項目において, 年代の主効果が認められた($F(3, 275) = 4.49, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .05$)。多重比較

の結果、20代の得点は30代、40代に比べて有意に低い傾向にあった($p < .01$, $p < .05$)。

また、独立変数を性別(男性・女性)と年代(20代以下・30代・40代・50代以上)、従属変数をマスク着用頻度、推奨解除の望ましさとする2×4の2要因参加者間の分散分析を行った(Table 1)。マスクの着用頻度について、性別、年代ともに主効果が認められた($F(1, 275) = 10.02$, $p < .01$, 偏 $\eta^2 = .04$); $F(3, 275) = 6.35$, $p < .001$, 偏 $\eta^2 = .07$)。性別間の差について、男性が女性より有意に低かった($p < .01$)。多重比較の結果、年代差について、20代が30代、40代に比べて有意に低かった($p = .01$, $p < .001$)。さらに、交互作用も認められた($F(3, 275) = 4.47$, $p < .01$, 偏 $\eta^2 = .05$)。単純主効果の検定の結果、20代における性別の単純主効果があり($F(1, 275) = 18.88$, $p < .001$)、男性における年代の単純主効果も認められた($F(3, 275) = 9.08$, $p < .001$)。20代において、女性より男性の着用頻度が低く、男性においては20代が30代40代に比べて着用頻度が低かった。推奨解除の望ましさについて、年代の主効果が認められた($F(3, 275) = 3.63$, $p < .05$, 偏 $\eta^2 = .04$)。多重比較の結果、30代が20代に比べて有意に望ましさの得点が低かった($p < .05$)。性別の主効果、及び交互作用は認められなかった。

	性別		年代		交互作用	
	F	偏 η^2	F	偏 η^2	F	偏 η^2
着用動機						
感染予防	2.01	.01	1.17	.01	2.39	.03
同調	0.04	.00	0.18	.00	0.17	.00
顔を隠す安心感	3.54	.01	2.45	.03	0.15	.00
身だしなみ	9.84 **	.04	3.22 *	.03	0.77	.01
喉の保湿	0.08	.00	4.49 **	.05	2.41	.03
着脱の面倒さ	0.11	.00	1.23	.01	1.90	.13
着用頻度	10.02 **	.04	6.35 ***	.07	4.47 **	.05
推奨解除の望ましさ	2.81	.01	3.63 *	.04	0.46	.01

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 1 性別および年代とマスク着用行動の分散分析結果

推奨解除の望ましさとマスク着用動機の関係

推奨解除の望ましさを従属変数、マスク着用動機の評定値(感染予防・同調・顔を隠す安心感・身だしなみ・喉の保湿・着脱の面倒さ)と性別、年代を独立変数として強制投入法による重回帰分析を行った結果、感染予防($\beta = -.19$, $p < .001$)、同調($\beta = .12$, $p = .03$)、顔を隠す安心感($\beta = -.30$, $p < .001$)、身だしなみ($\beta = -.18$, $p = .01$)が規定要因として認められた。モデル全体の決定係数は.21であった。

考察

本研究の結果より、「身だしなみ」において男女差と年代差が認められた。女性は化粧をする人が多く、身支度に手間がかかるため、マスクにメリットを感じている人が多いと考えられる。また、20代に比べて30代が多かったのは社会的なマナーとして日常的に身だしなみを整えることを求められる場面が多く、化粧や髭剃りなどがマスク着用によって簡略化できるためではないかと考えられる。加えて「喉の保湿」においても年代差が認められた。30代40代に比べて20代は喉の乾燥の症状が現れにくいいため、着用動機とする人が少なかったのではないかと考える。マスク着用頻度については、特に20代の男性において着用頻度が低く、マスクによる身支度の時間短縮や喉の保湿といったメリットを感じていないと推測できる。推奨解除の望ましさについては、20代に比べ30代は推奨解除を望んでいない。

一方で、マスク着用動機の「顔を隠す安心感」において、性別と年代における差が認められなかった。差が認められなかった要因として、性別・年代を問わず「顔を隠す安心感」を動機としていたのか検討するため、全ての場面で「顔を隠す安心感」を選択しなかった場合の評定値0を固定値とした1標本のt検定を行った結果、有意な差が認められた($t(282) = 9.13$, $p < .001$)。このことから、年代や性別に関係なく「顔を隠す安心感」を動機としてマスクを着用している傾向があることがわかった。

さらに、「顔を隠す安心感」の得点と推奨解除の望ましさ得点が負の関係にあり、「同調」の得点と推奨解除の望ましさ得点が正の関係にあることが明らかになった。この結果から、マスクの着用動機によって今後のマスク着用行動に違いがある可能性が示唆された。着用動機の違いによって今後のマスク着用行動を予測できた意義は大きいと考える。これらにより、仮説1と仮説2は支持され、仮説1-Aと仮説1-Bは支持されなかった。

本研究の課題として、サンプルサイズが小さいことが挙げられる。また、マスクの着用行動は環境の変化に伴い変容していくと考えられるため、本研究の結果が頑健なものであるか確認する上でも今後も継続的な調査が必要である。

主要引用文献

吉澤 裕子・吉澤 英里(2022). COVID-19 流行禍における大学生のマスク着用動機の検討 容装心理学研究, 1(1), 20-28.